

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04649

研究課題名(和文)日本・ニュージーランド・イタリアの保育実践評価に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research on ECCE practice assessment in Japan, New Zealand and Italy

研究代表者

塩崎 美穂 (SHIOZAKI, Miho)

日本福祉大学・子ども発達学部・准教授

研究者番号：90447574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ニュージーランドでは「学び手としてのアイデンティティ」を意味づける手だてとして「物語によるアセスメント(評価)」が重視され、イタリアでは、決められたカリキュラム(設定された教授)と偶然や即興の重なりで生成する学びを「記録(観察し解釈すること)」が「評価=何を取り出して価値づけするか」であるとされる。翻って日本では、実践者の形成的評価(つねに途上にある学びの価値づけ)を保育者個人の嗜好程度に理解する傾向がみられる。保育者の視点のなかに、政治的文化的歴史的な価値判断が内包されていることをいかに自覚していくか。保育者が子どもの学びをめぐる価値を判断することが「評価」であることの理論化が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育者が日々行う保育実践の「評価」は、それぞれの文化的歴史的な文脈のなかで保育者がなにに価値をおくかという判断によって成り立っていることが各地域の調査によって確認された。このような価値判断をとともなう「評価」が子どもの学びを促進する方向に機能するためには、保育者に継続的な学びの機会が保障されている必要があることがわかってきた。本研究成果を踏まえ、保育現場へのサポート・ネットワークの中に、保育者の「評価」に影響を与える価値判断について、保育者が自覚的に学べる機会が必要であることが提案できる。保育の専門職としてのネットワーク形成につながる現職研修でも、「評価」の視点を取り入れることが必要である。

研究成果の概要(英文)：In New Zealand, emphasis is placed on "Assessment by Story" as a means to mean "identity as a learner", and in Italy, learning that is created by the overlap of a fixed curriculum (set professor) and chance or improvisation is emphasized. "Documentation (observing and interpreting)" is said to be "evaluation = what to extract and value." In Japan, on the other hand, there is a tendency to understand the formative evaluation of practitioners (always valuing learning on the way) to the degree of preference of individual practitioner. How do you realize that political, cultural and historical value judgments are included in the perspective of childcare workers? It is necessary to theorize that it is "assessment(evaluation)" that a childcare worker determines the value of a child's learning.

研究分野：保育思想史

キーワード：保育実践評価 保育者の専門性 アセスメント実践 参加型学習 学習保障ネットワーク 学びの持続的展開 物語的アイデンティティ獲得 諸外国の保育思想

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

（1）貧困連鎖改善にむけた保育実践への注目

貧困の世代間連鎖を断つためには、学びの積み重ねによる知識や技術の習熟構造を理解し、子どもの発達格差が加齢とともに増幅していく仕組みを踏まえ、その後の人生に必要な資質や資源を幼少期のうちに身につけられるよう、質の高い保育をすべての子どもに保障する必要がある。OECD（世界経済機構）は、質の高い保育が、学力向上や進学率の上昇、所得の増大、犯罪率の減少をもたらす成果を示したことを受け、各国の子どもが保育の場でどのような力を身につけているかを分析し、乳幼児期に身につけるべき能力とは何か、どのように計測すべきかを議論し始めていた。我が国でも、平成 27 年度にスタートした「子ども・子育て支援新制度」では、子どもの権利条約の理念に即し、すべての子どもが自分の家族の社会経済的状況にかかわらず「守られる権利」や「参加する権利」が保障されるよう、安全に保護されつつ成長できる生活の基盤をもち、社会の一員として参加し自らの意見を表明できる質の高い公的保育によって、格差を温存し兼ねない孤立した子育て・子育ちを脱し、未知の未来を生きぬく力を獲得することが目指され始めていた。

（2）保育実践の具体的内容を踏まえた調査研究の不足

このように良質な保育への期待が高まるなか、申請者らは、次の時代を生きる子どもたちが、これまでの社会が経験したことのない新しい課題に直面しても他者と手を取り合い、生涯を通じて学び続けられるよう、「できないことに好奇心と情熱をもって取り組み」「進んで他者と協力する構えをもち」「自信をもって自分の意見を述べる」ことのできる保育実践の実現に向けて、世界で最も注目を集める二つの保育カリキュラム、ニュージーランドの「テ・ファリキ」とイタリアの「プロジェクト・アプローチ」などを参照しながら、日本の保育現場の実情に即して研究を重ねてきた。その結果、保育者による「教え込み」でも、子どもに過度に依存する「放任」でもない、「子どもとつくる」保育のカリキュラム開発の必要性を明らかにしてきた。しかし実際の保育現場では、園生活の子どもの学びを学校の教科との関連で把握しようとするために、子どもの行動の記録やカリキュラムの指導計画が緻密であればあるほど、目の前の子どもの姿が見えにくくなり、子ども自身の学びの深まりがとらえきれないことも起こっている。例えば、年齢にふさわしい発達基準にあてはめた評価や、一人ひとりの育ちよりもクラス全体の到達度を重視した評価が行われる場合、子どものあらゆる行為を表現として受けとめ、子どもの声を聴き、子どもとともにつくる保育に向かう評価基準の考察については十分ではない。保育者が直感的に行っている子ども理解の視点を抽出し、どんな評価項目をもてば子ども自身の参加や探求を重視する質の高い保育実践を実現できるのか、評価項目の検討を含む保育カリキュラムの構造分析は、申請者の知る限りまだ本格的には行われておらず、調査研究が不足している状況であった。

2. 研究の目的

近年、保育の質をめぐる研究では、知識や技能の習得だけで子どもの育ちを評価せず、能動的参加や熱中の探求など、知識や技術をもとに自ら課題に向かい参画する姿を含めて評価し学びの潜在的可能性を保障する必要が説かれている。だが、計画的実践の具体化につながる事例はまだ多くない。本研究の目的は、参加や探求を重視する保育評価が実際にどのように実践されているのか、日本、ニュージーランド、イタリアを調査し、すべての子どもに質の高い保育を保障するための基礎データを収集することにある。各国の歴史的文化的保育実践の背景を踏まえ、現在の保育カリキュラム・デイリープログラム・保育者養成・現任研修・保育記録などを参与観察やインタビュー等から調査し、保育者の専門的な子ども理解や保育技術の伝達過程を比較検討する。

3. 研究の方法

本研究は、日本、ニュージーランド、イタリアの保育実践においてどのように「評価」が行われているのか、保育カリキュラムのつくり方、保育者養成のあり方、保育記録の取り方、保育研究者の役割などを調査し、質の高い保育をうみだす保育の構成要素や制度的枠組みを解明する。以下が、そのための研究計画および方法である。

（1）日本、ニュージーランド、イタリアの保育実践に関する理論的研究 【H29～31 年度】

本研究の理論構築を可能にするために、各国の保育理論研究の変遷を検証する。担当省庁の関係書類、関係法規、国家カリキュラムなど基礎データを調べる。日本、ニュージーランド、イタリアの歴史的文化的文脈や特殊性を捉え、国際的な学際研究における位置づけを明確にする。

（2）日本の保育者の保育実践「評価」に関する視察調査研究 【H29～30 年度】

（1）の文献研究による理論の精緻化を図りつつ、日本の保育実践調査に着手する。これまで研究代表者・研究分担者が保育実践者と共同で質的实践研究を行ってきた福島（大宮『子どもの心

が見えてきた』)、東京や山梨(加藤『5歳児の協同的学びと対話的保育』)、熊本や愛知(塩崎『保育の哲学』)の各保育の場を視察調査し、保育者が実践の何をどのように「評価」しているのか、実証的なデータを収集・整理する。その際、教材研究や環境設定を選ぶ中で何が「評価」されているのか、実践を遂行する保育者の資質と「評価」にはどのような関係があるのか等、地域毎の実践の枠組や構成要素についてデータを収集する。

(3) ニュージーランドの保育者の保育実践「評価」に関する視察調査研究【H29年度】

ニュージーランドの保育評価研究の第一人者であるワイカト大学 Carr 教授 (Margaret Carr) や Lee 教授 (Wendy Lee) が共同で研究し、2015 年に教育優秀賞も受賞している Mangere Bridge <https://www.aka.org.nz/blog/mangere-bridge-kindergarten-wins-education-excellence-award> を視察する。本園への訪問経験のある研究代表者と Carr 教授の著作を訳出している研究分担者の大宮が中心となり対話や表現をめぐる保育実践に注目し「評価」を抽出する。世界的に参照される先行研究である Learning Stories ; Constructing Learner Identities in Early Education が生み出された 保育実践を視察し、実践後に園長をはじめとする保育実践者と省察を行い、「評価」についての保育者の知見もデータとして収集する。同様に保育実践研究者であるワイカト大学教員 (Claire McLachlan) の共同研究先である保育の場も視察調査する。

(4) イタリアの保育者の保育実践「評価」に関する視察調査研究【H30年度】

イタリアの保育実践について、研究協力者の Tullia 氏 (Tullia Musatti・イタリア国立教育研究所) のかかわるピストイア市の保育を視察調査する。また、ヨーロッパにおける保育実践評価研究を推進してきたレッジョ・エミリア市の保育の場を含め、そこでの教育的効果や「評価」における課題について加藤と塩崎が中心になって調査する。

4. 研究成果

(1) 日本、ニュージーランド、イタリアの保育実践「評価」に関する理論的研究

日本

幼稚園教育要領や保育所保育指針など、2017 年からの改定によって「就学までに育ててほしい姿」として“10の姿”が示された。ここでは、乳幼児期から大学までの一貫した保育・教育カリキュラムの構築が具体的に意識されている。生涯を通じて学び続ける学び手を市民として育てることも想定されている。この10の姿の主眼は「主体性」をもった市民を育てることにある。ただし、10の姿は子どもが育つ・育てるべき理想モデルではないという説明が繰り返し行政説明や研修などでなされてはいるが、実際には、10の姿をモデルとみなし、それが達成できるかどうかをはかる評価の指標として意識されやすい状況にある。標準的な発達モデルとして10の姿を設定し、その標準との距離で個々の能力をはかる評価が蔓延するなかで、人の主体性が育まれる学びの環境を整えることは難しい。主体的であることと標準に合わせるものが評価の基準として矛盾をきたす。誰もがクリアすべき同じ到達目標を持っているという評価の設定自体が、主体的に人が生きることを困難にしている。それぞれの人が自分で価値を判断しながら生き、共同体内の価値を対話によって刷新していくことが、これからの不確実な未来を生きていくためには必要であるにもかかわらず、現在の限られた人的物的資源の中では多くの場合、子どもの願いに応える保育の実現は容易ではない。少ない保育者で多くの子どもの安全を守ることが優先される場合、同一行動を促す、一律的な、大人が決めた子どもモデルに従わせる保育が行われることが多い。日本の現行の保育制度のもとで、主体的に人が生きるための評価軸をどのように設定すればよいのか、いかにしたら限られた保育条件のなかで子どもが自ら学びへ向かう保育実践ができるか、各種の保育現場の実践者、各自治体の保育行政担当者による模索が続いている。保幼小中高大の一貫した学びの経路(ナショナルカリキュラム開発)の構築は、引き続き課題として検討される見通しである。子どもが「学ばない状態」から喜びをもって「学ぶ主体」へ変化するための方途を探る必要がある。

ニュージーランド

学びとは、人が自分を「学びの途上にある学び手であることを自認する」こと、「可能性に満ちた自己像(possible self)をもつこと、学びの共同体の一員として重要な役割を担っているという自信をもつこと、「憧れにひらかれたアイデンティティ(aspirational identity)」をもつこと、これらの学びを支えるために、学び手を学び手として承認する強力な他者(保育者や教師)が必要であることなどがニュージーランドでは考えられていることがわかった。

加えて学び手を承認する評価については、次のように考えられている。子ども自身が「可能性に満ちた自己像(possible self)」をもつためには、周囲にいる者たちがそう認めること(アセスメント=評価)が必要である。また学びを支える者自身が学び手であり、学び手としてのアイデンティティ構築の循環のなかに評価(アセスメント)を位置づけることが強調されている。学び手としてのアイデンティティ獲得、学ぶことを生き方の基盤にするためのアセスメント(評価)とカリキュラムの関係についての模索が続けられていることがわかった。

とくに「物語としての評価」に関心が高いが、「物語」としてアセスメントを実施するののかについては、懲罰や褒賞(文脈から切り取られた一時点での数値/点数)ではなく貢献あるいは信

頼のネットワーク(つながり)のなかで人は学び手になることが前提にあるからだと考えられる。「物語」として<学びの文脈>を描くこと、<学びの途中経過>の内実を自覚することが学びの発展・深化・継続には肝要であるため、「物語」が必要だと考えられているということである。ニュージーランドは、そもそも、建国以来、マオリの人たちとの共生によって成り立ってきた。現在、オセアニアでは最大の多民族国家でもある。多様なアイデンティティに対応する「物語」を軸にした評価基準(標準型を設定しないこと)が、重要な歴史的な文脈の中にある。学びを把握するために「形成的評価」を行い、学びはいかなるときでもその途上にあるものであることを捉えられる評価(アセスメント)が実践され続ける仕組みが整えられている。

イタリア

子どもを理解すること、つまりそこにある子ども自身の学びについて問うことの周辺には、教授と学習の関係の構造化を不可避としていることが、北イタリアの保育の場では意識されている。レジスタンス運動を経て民主的な共同体のあり方を今日でも模索し続けている北イタリアの小都市では、「権利主体としての子ども」の学びについて、予測不可能性を大切にすることがその創造性の源として大切だと考えられている。決められたカリキュラム(設定されている教授)と、偶然や即興の重なりの中にある文脈を受けて発生する学びをつなぐものが「記録(観察し解釈していくこと)」とともにある「評価」であるという。疑わしさや不確実性を明らかにする記録行為(ドキュメンテーション)によって、教授の予測を越える教育の自由が保障される。計画や見取り図と学びの間にある隙間を捉える記録が重要である。どう評価するかということは、何を取り出して価値づけするかを含めて、大人の見取り図と子どもの学びのズレを明らかにすることである。理想のあるべき姿にとらわれず、不確実性を保育の構成に取り込むこと、いまもっているもの、いまの存在から保育をつくるために学習の過程で働いている諸要素が明示化、可視化、論点化される記録が必要である。プロジェクトとは、「あらかじめ定めた計画や手順」ではない。「過程それ自体のなかから浮上する価値ある素要素によって育てられる仕事の展望」である。どこに価値をおくか、価値を見て取るかが、評価である。(これらの保育理念のもとで保育が構築されていることは、イタリアでの参与観察やインタビューからも明らかにされた。)

(2) 日本の保育者の保育実践「評価」に関する視察調査研究

調査場所； 熊本市やまなみこども園、さくらんぼ保育園、はけみや保育園、河内からたち保育園、名古屋市名東保育園、ななくさ保育園、みよし保育園など
調査期間； 2017-2019年度を通じて月に一回ずつ程度視察訪問
調査内容および成果； 保育実践を参与観察し、その後、保育実践者に実践のなかにみられた判断についての評価の基準(なにに価値をおいているのか)についてなどインタビューを行った。幼稚園教育要領や保育所保育指針などが改定されるなか、保育者は、子育て支援としての保育業務の多様化、保護者の労働事情/生活状況への対応、保育者不足の中での慢性的な過剰労働にあっても、いずれの園でも、子どもが主体的であることの内実、民主的な社会をつくるための乳幼児保育について考えている。ただし、実践者による形成的評価(途上にある子どもの学びのとらえ方)については自覚的であるよりも、あたかも「自然」なもの、保育者個人の人格や嗜好としてとらえられる傾向がみられた。子どもの学びを保育者がとらえるその個人的にみえる視点のなかに、政治的文化的歴史的な価値判断が内包されていることをいかに自覚していくか。保育者が子どもの学びをめぐる価値を判断することが「評価」であることの理論化が必要である。

(3) ニュージーランドの保育者の保育実践「評価」に関する視察調査研究

視察調査期間・場所・内容； 2018年8月26日-9月4日、ニュージーランド(オークランド)の保育の場(幼稚園/保育園)を視察訪問。またワイカト大学 マーガレット・カー教授へのインタビュー調査。
視察調査成果； 財政難から福祉教育予算は減少傾向にあり、さらに保育時間が長時間化し、保育者が記録を書くことや保育者同士が実践について話し合う時間の確保には工夫が必要になってきている。子ども一人ひとりの「学びの物語」が保育者はもちろん保護者によって書かれ、それを子ども自身が振り返る中で子ども自らが自分の学びを確認し、保育者と保護者が子どもの育ちを共に理解する(保育をアセスメントする)仕組みがつくられている。視察訪問したオークランド(南部)にある Mangere Bridge Kindergarten (以下マンゲレブリッジ幼稚園)では、いかなる年齢の子どもでも「有能な学び手として捉える」という視点が幼小の接続期を通して貫かれていた。それぞれの子どものポートフォリオが幼小をまたいで作成され、それぞれの物語が周知される。そこでは、学びに無自覚な幼児期から自覚的になる児童期になっていくというような発達図式はなく、すべての子どもにあてはめられる「こうあるべき」という子ども像も示されていない。保育の場から小学校へと三つの「境界」を越えていく子どもたちの個々の物語こそ、自他の境界を越えようとする挑戦者の学びであると位置づけられている。

(4) イタリアの保育者の保育実践「評価」に関する視察調査研究

【1回目 2018年2月】2018年2月22日午前10時-12時、午後2時-17時
視察調査場所；〔乳児保育園〕 SCUOLA DELL' INFANZIA IL MELOGRANO via Cavallerizza

〔幼稚園〕 SCUOLA DELL' INFANZIA BRUNO CIARI via dei cipressi,
視察調査内容・結果； 三歳以下の子どもが通う「乳児保育園」と三歳以上の子どもが通う「幼稚園」を視察訪問し、保育実践を参与観察し、その後、保育者へのインタビューを行った。北イタリアの園をいくつか訪問し保育実践の文化的背景について考察を深めた。保育内容を選ぶ際、保育の途上でその実践に価値づけを与えるが、「誰の文化なのか？誰の声を聴こうとしているのか？誰が主人公なのか？」ということをつねに問う、文化的思想背景があることが散見された。ルネッサンスは、古典古代（ギリシア、ローマ）の文化を復興しようとする文化運動であり、14世紀にイタリアで始まり、やがて西欧各国に広まった文化運動である。その文化運動を苗床にし、イタリアは世界大戦中に民主的市民社会の素地である抵抗運動を展開してきた。その後、各市に展開されている保育実践には、共同体としての討議的（対立的）民主主義・個人の尊重を重視する文化がある。対立の歴史を経て北イタリアの歴史文化的文脈に息づいている。

【2回目 2019年2月】2019年2月21-28日

Decomano 幼稚園訪問（約100定員ほど「幼稚園1」3-5歳）小・中学校と併設、Bolonya MAST (MAST Foundation ; via Speranza 42 I-40133 Bologna www.mast.org/nido)。Gualandi 財団の保育の場では、朝きて、子どもは自分であそびはじめる。それから子どもの場、あそび、興味の流れに合わせてゆるやかに4つのグループになり、保育者がなにをしたいのか聞き、その子どもがしたいことを選択できるようなグループにする。保護者は迎えにくるとき、自分の子ども（の写真）を探し、今日はどこのグループであそんでいるのかみつけてお迎えに行く（固定のクラスはない仕組みをもつ）。子どもを「大人が用意した型にはめないようにする」ことが徹底されている保育の仕組みを模索している。サンミニアート市訪問では、乳児保育の普及率は地域のよって大きなばらつきがあることが説明された。トスカーナ（中部/北）55%、南は2%である。アトリエ（ラボ）では、手の届くところに試せるものが置かれ、感触、色、形、においなど試すことをさまたげない。保育者と一緒にした方がいいものは棚の上に、ガラスの器に入れ、子どもから中身が見えるようにして置かれていた。トスカーナ・アプローチの説明をうけたフィレンツェ捨て子養育院で保育も視察した。

視察調査成果としては、計画/準備/教材研究/対話/即興という保育実践をめぐる一連の取り組みが、日本や OECD 調査などで前提とされている PDCA サイクルによるチェックリスト方式とは異なっていることがより明確にわかったことである。子どものグループのつくられかた（協働の仕方）では、保育者による思い込みを呼び込みやすい準備ではなく、その日その時に起こる即興的な関係のなかでの出来事を重視できる仕組みを採用している。保育者がある程度意図して子どもに渡していく物語（劇、ごっこ）については、それらの教材を渡したとき子どものなかにどのようなイメージが喚起されるのか、繰り返し検証されていた。物語による評価（アセスメント=人間理解）は「記録」によって支えられており、その記録は、保育者が書きたいという情熱をもっていなければ生成されないものとして位置づけられている。

日本の実践記録は保育者として書かなければならない義務というような風潮があるが、それとは異なる記録への向かい方が重要であることがわかった。たとえば、アッジの聖フランチェスコの生き方（物欲からの完全な離脱、所有の否定）のような美意識にしても、イタリアでは各地域に何百年もかけて実験的に取り組まれている思想の文化的歴史的实践がある。各地の保育実践がなにを大事にしているのか、あらためて、歴史的考察が必要であることが確認された。

以上の調査訪問および検証から、3カ国の保育実践において質が高いと判断される実践と「評価」の関係分析を総括として行った。

保育者の価値判断である「評価」が子どもの学びを促進する可能性が高くなるのは、保育者のストレスを軽減させる労働条件が整い、実践者自身が保育にやりがいを見いだせる継続的な学びの循環がある場合であった。また保育者が公私にわたる人的ネットワークを駆使する構えをもち、保育者の資源として対話的關係を広く実践できる場合（つまり保育者自身も未知の世界の学び手である場合）、その場に生きる子どもの学びは深化拡大継続する。なお、保育者へのサポート・ネットワークは、日本は中央集権的な研修制度、イタリアは地域ごとにある文化的人的つながりという資源、ニュージーランドは多文化共生を促す実践と理論の循環的仕組みとして形づくられている。それぞれの地域の基盤にあるネットワーク形成が、保育者の専門性を高める社会関係資本の構築を促す実践的保育者養成プログラムの開発や現職研修モデルを構築する際にも考慮する必要があることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 塩崎美穂	4. 巻 296
2. 論文標題 あそび（第58回全国保育問題研究集会）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究	6. 最初と最後の頁 16-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩崎美穂	4. 巻 12
2. 論文標題 海外の社会福祉事情 イタリアトスカーナ州：フィレンツェの捨て子養育院	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子どもと福祉	6. 最初と最後の頁 104-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 499
2. 論文標題 保育所保育指針解説書を批判的に吟味する（上）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保育情報	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 500
2. 論文標題 保育所保育指針解説書を批判的に吟味する（中）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保育情報	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 501
2. 論文標題 保育所保育指針解説書を批判的に吟味する(下)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保育情報	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 28
2. 論文標題 子どもの主体性を育む視点を探る-保育指針改定を受けて-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保育の研究	6. 最初と最後の頁 18-36
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩崎美穂	4. 巻 11
2. 論文標題 「学びの構え」をかたちづくる保育・教育実践-保育内容「言葉」に関する指導方法-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本福祉大学 子ども発達学論集	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 769
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる(第30回)「子ども目線の評価」がもたらす保育の喜び	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 770
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第3 1回）「学びの物語」を振り返ることが子どもの対話と思考をはぐくむ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 43-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 771
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第3 2回）園での学びを、学校での学びに子どもはどう結びつけていくか：「接続」を子どもの側から捉え、 支援する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 772
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第3 3回）保育実践の本質は「意味づけをめぐるやりとり・調整」にある	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 24-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 773
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第3 4回）子ども目線の評価を、「変更可能な計画」づくりにつなげる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 48-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮 勇雄	4. 巻 774
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第35回）個性的な育ちと社会性の育ちの関係を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮 勇雄	4. 巻 775
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第36回）「今の学校に子どもを合わせよう」という「接続」論を乗り越える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮 勇雄	4. 巻 777
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第37回）「接続」とは、「アイデンティティ」と「学びの継続」の問題である	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮 勇雄	4. 巻 480
2. 論文標題 遊びが子どもを成長させる（「ほいくえんすき」が聞こえる保育園に）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 女性のひろば	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 22
2. 論文標題 保育所における教育とは？（特集 保育保健に関する最近の話題）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 578-581
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤繁美	4. 巻 51
2. 論文標題 鼎談 この50年 子どもを取り巻く世界はどう変化してきたのか（特集 これまで これから 子ども・文化）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子どもの文化	6. 最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 51
2. 論文標題 保育がむかう道：教育要領・保育指針等の改定を通して（特集 これまで これから 子ども・文化 保育・教育のこれまで・これから）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子どもの文化	6. 最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤繁美	4. 巻 52
2. 論文標題 子どもの文化研究所 50周年記念・トーク 君たちに未来を託す：明日の市民をどう育てるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どもの文化	6. 最初と最後の頁 2-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 778
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第38回）学びの接続には「自己アセスメント」と「学びをめぐる語り合い」が欠かせない	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大宮勇雄	4. 巻 780
2. 論文標題 「学びの物語の保育実践」再論 人間尊重の視点で、「乳幼児期と小学校教育との接続」を論じる（第39回）しつけが目指す「自立」とは：待つ力と自我と学びの言葉	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育通信	6. 最初と最後の頁 24-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩崎美穂	4. 巻 12
2. 論文標題 日本・ニュージーランド・イタリアの保育実践評価に関する基礎的研究 - 「表現」を理解しようとする評価（アセスメント）について-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本福祉大学子ども発達論集	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩崎美穂	4. 巻 279
2. 論文標題 「保育」の公共性再考：倫理的・政治的实践としての保育をつくる（特集 子ども子育て支援新制度で幸せか？）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生活経済政策	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 塩崎美穂・大宮勇雄・矢萩恭子・菊地知子
2. 発表標題 NZにおける就学移行期プロジェクト 保育実践評価に関する基礎的研究(1)
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩崎美穂・大宮勇雄・矢萩恭子・菊地知子
2. 発表標題 NZにおける保育環境改善のとりくみ 保育実践評価に関する基礎的研究(2)
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miho Shiozaki
2. 発表標題 Asia pacific regional symposium:Current Conditions for Under Threes Toward sustainable future in the Asia Pacific Region
3. 学会等名 OMEF (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩崎美穂・川田学・大宮勇雄・加藤繁美
2. 発表標題 ラーニングストーリーにおける子ども理解 - 評価(アセスメント)と保育の質 -
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 マーガレット・カー 塩崎美穂
2. 発表標題 学びの物語 - ニュージーランドの実践が提起していること -
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩崎美穂・大宮勇雄・加藤繁美
2. 発表標題 イタリアの保育者の保育実践「評価」に関する視察調査研究 報告会 - 実践・思想・コミュニティ -
3. 学会等名 保育プラザ 海外視察報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩崎美穂
2. 発表標題 保育実践評価に関する基礎的研究(3)
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 近藤幹生、塩崎美穂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ななみ書房	5. 総ページ数 64
3. 書名 保育の哲学 4	

1. 著者名 近藤幹生、塩崎美穂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ななみ書房	5. 総ページ数 64
3. 書名 保育の哲学 4	

1. 著者名 中坪史典編著、塩崎美穂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 テーマでみる保育実践の中にある保育者の専門性へのアプローチ	

1. 著者名 大宮勇雄、川田学、近藤幹生、島本一男、塩崎美穂	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひとなる書房	5. 総ページ数 144
3. 書名 どう変わる？何が課題？ 現場の視点で新要領・指針を考えあう	

1. 著者名 秋田喜代美、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター、塩崎美穂	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 435
3. 書名 保育学用語辞典	

1. 著者名 松本伊智朗、小西祐馬、川田学、塩崎美穂	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 352
3. 書名 遊び・育ち・経験	

1. 著者名 マーガレット カー、ウェンディ リー、大宮勇雄、塩崎美穂	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひとなる書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 学び手はいかにアイデンティティを構築していくか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加藤 繁美 (KATO Shigemi) (00191982)	東京家政大学・子ども学部・教授 (32647)	
研究分担者	大宮 勇雄 (OHMIYA Isao) (10160623)	仙台大学・体育学部・教授 (31301)	